



発行 日本リスク研究学会

会長 土田 昭司

事務局 〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35

関西大学社会学部 土田研究室気付 発行責任者・広報担当 近本一彦

TEL. 06-6368-1121(代) FAX. 06-6368-0735

mail: office1@sra-japan.jp URL: <http://www.sra-japan.jp/cms/>

日本リスク研究学会は、日本におけるリスク研究と研究者相互の交流を図ることを目的として、1988年に米国に本部をもつ国際的なリスクについての学術団体であるSRA(The Society for Risk Analysis)のJapan sectionとして発足しました。現在では、米国、欧州、東南アジアの諸学会と緊密な連携をとりつつ独自の活動を展開しています。

1. リスク放談(第5回)

この「リスク放談」のコーナーでは、著名な先生方のリスク研究に関する想いやご意見を紹介致します。

リスクはクスリ、クスリはリスク

元日本リスク研究学会会長 酒井泰弘

1. ピッツバーグを思い出す——リスク学への勧誘

「ミスター・サカイ。《リスクの経済学》という名の経済学が生まれつつありますよ。君は若いのだから、この新しい分野に挑戦されるといいでしょう」

時と所は、はるか1970年代始めの鉄の町ピッツバーグ。かの地の大学で数理経済学を教えていた若輩・サカイは、招待講演に来られたゲーム理論の大家・モルゲンシュテルン先生に対して思い切って、次のような質問を發した。

「先生、自分は経済学の現状に満足できません。何か新しい方向はないでしょうか」

これに対する先生の親切な御返答が、冒頭の言葉であったのだ。正直言って、この答えはいささか「想定外」であったが、私は持ち前の「根性」でリスク学に挑戦することに決めた。アメリカの友人の何人からは、「それは《リスク・ビジネス》だ。余り深入りせず、君の十八番の数理経済学を続けたほうが賢明策じゃないの」と幾度も忠告された。それにもかかわらず、否それだからこそ、一本気の私は、モルゲンシュテルン先生からのリスク学への勧誘を素直に受け入れることに決めた。

振り返ってみれば、私がピッツバーグ大学で教鞭を執ったということ——そのこと自体が、当時のまだ貧しい日本で学部学生時代を過ごした私にとっては、想像を絶する「一大珍事」であったかもしれない。何が私をして、遠くアメリカの大学院に留学させることにさせたのだろうか。何が私をして、アメリカの大学生に教える羽目にさせたのであろうか。何が私をして、原爆被災地の広島へ移り、また後に学園都市の筑波へ移転して、わが「日本リスク研究学会」にかくも長く深入りさせることにさせたのであろうか。実は、これら全てのことは、もともと予定されていたことではないのだ。

(2 ページに続く)

<目次>

- | | |
|------------------------------|--------------------------------------|
| 1. リスク放談 (酒井泰弘) | 4. 第2回リスク世界会議への若手会員派遣プログラム [結果報告] |
| 2. From the President (土田昭司) | 5. 事務局便り |
| 3. 日本リスク研究学会誌編集委員長の交代 | 6. 編集後記 (近本一彦) |

(1 ページからの続き)

人生とはロマンであり、リスクである。人生はいわば筋書きのないドラマだ。私は何かの因縁があっただけ、こうして「リスク放談」を執筆することに相成ったが、放談の矛先がこれからどこへ向かうのかは、今の段階でも十分定かではない。何分、リスクな「放談」ということなので、恐らく「酒井節」のやや行き過ぎた表現があるだろうと危惧されるが、ここで予め読者の慈悲深い御寛恕を乞い願う次第である。

2. 大阪大空襲を耐え忍ぶ——人生の原点

私の「人生の原点」は、かの大阪大空襲だ。私の一家は 1945 年当時、天王寺と大和川の間位のところに住んでいた。「ウーン、ウーン！」——3 月のある日、突然に空襲警報のサイレンがけたたましく鳴り響いた。

「おい皆、逃げろ！今度の B 2 9 の編隊は物凄い数だわ。大阪の町中が焼き殺されちゃうぞ！」

一家の全員はしばらく防空壕の中に潜んでいたが、低空から幾重にも束状に落下してくる焼夷弾の嵐に抗しきれず、近くの池に隣接する通称サル山に避難した。母は当時 5 歳の私の片手を強く握り、姉は井戸水を一杯入れたヤカンを持ち運んでいた。こういう一家の「逃避行」は、大空襲の下で一般市民が採りうる恐らくベストの「リスク対策」だったに相違あるまい。

私は本当に幸運にも、20 回以上に及んだ大阪大空襲の中をひたすら耐え忍び、ここまでさすらいの人生を生き延びてきた。詳しくは分からないが、大空襲時における私の生存確率は相当に低かったのではなかろうか。従って、戦後の混乱期からの長い半生は、私自身にとって「余生」のようなものだ。余生はもちろん、天からの贈り物であり、「ダメモト」の無欲な気持ちでリスクにチャレンジする機会を与えてくれた。

「淡々とチャレンジする」ということは、人生の転機において余り深く考えずに、「勢い」や「はずみ」に乗じて意思決定を行なう事に繋がりがちだ。事実、私は少年時代、近所の親しい町医者から、「ボクちゃんよ、もしボクが K 大医学部へ行ったら、ワシの医院を喜んでボクに譲るよ」と何度も勧誘された。私は一度ならず病氣撲滅の夢を実現しようと考えたが、戦後の経済混乱期の影響もあって、庶民の貧乏救済のほうに関心を変えてしまった。しかも、この K 大学ではなく、港の景色の美しいキャンパスにいたく心を奪われて、もうひとつの K 大学の経済学部を受験し合格するという有様だった。人間の意思決定はそれほど合理的ではない、ましてリスクの下での意思決定は複雑であり、一筋縄ではいかないのだ、という私の信念は既にこのころに醸成されていたともいえよう。

3. 集会とデモを横目で見やる——「日本崩壊」の恐れ

大学時代の日本社会は、まるで「革命前夜」の様相だった。とくに、天下の T 大学法学部出身の先生の講義は勇ましく、常に「革命ラッパ」が鳴り響いていた。

「学生諸君、君たちは今の時代に生きていて本当に幸せであります。資本主義は自己矛盾を増大させ、やがて社会主義に取って代わられることは、既に理論によって予言されております。しかるに現在、この予言の正しさが毎日のニュースによって証明されつつあります。ほら、ソ連の人工衛星スプートニクが大空高く飛び、アメリカ国民の度肝を抜いておるのであります！」

ところが、現実の歴史は、この「革命先生」の予言通りには進行しなかった。1991 年 12 月、ソ連は国家として正式に消滅し、ロシアなどの 15 の共和国に空中分解した。自己矛盾を増大させ崩壊したのは「ソ連式社会主義」のほうであって、「アメリカ式資本主義」のほうは色々問題をはらみながらも、未だ存続して

いるのだ。いわゆる文系の「予言」とは、皆既日食や彗星の予想出現時刻のようなレベルの予言ではない。同じリスクといい不確実性といっても、その意味する内容が、文系と理系との間では相当に異なるようだ。

私は日本の学生時代、連日のように行なわれる集会とデモを横目にみながら、悶々と遣りきれない日々を送っていた。「友人の従妹の樺美智子さんは国会デモで圧死したし、日本自体がそのうちに崩壊するのではなからうか？」と、ボンヤリした不安が頭の片隅から離れることがなかった。

そのうちに、私は幸か不幸か、K大学助手となった。暫くしてのある日、自分の研究室に出かけると、そのドアに大きな穴が開いており、タイプライター・外国図書などの貴重品がごっそり持ち去られたことに気が付いた。

「騒々しい日本では、もはや勉強が不可能だ。かくなる上は、《革命先生》の話では早晚崩壊の運命のアメリカかもしれないが、その《崩壊大学院》の一つに留学することにしようかな。大阪大空襲で一度は失いかけた生命なのだから、《第二の人生》を彼の地で送るのも何かの因縁というものだろう」

4. 岡潔先生の名言に感銘する——「サムライ英語」のチャレンジ精神

私はこうして、気分転換とチャレンジ精神発揚(?)のために、アメリカ東部で奨学金の貰えるロチェスター大学研究科に入学した。私の留學生活で一番支えになった言葉は、稀代の数学者・岡潔博士の「放談的名言」である。

「私は数学専攻に踏み切るのには臆病だったが、外国の文化を恐ろしいと思ったことはなかった。この点、一般の日本人は逆で、数学というものには恐れを知らなさすぎるくせに、外国文化を恐れすぎる。この誤りをはっきりいっておきたい」(『春宵十話』, 1963年)

岡先生のこの名言は残念ながら、45年経過した今日の日本でも通用すると思う。一般の日本人は外国文化、とくに英語を恐れすぎている。英語を喋れないことが、いわば「恐ろしいリスク」のように感じられているのだ。実は、アメリカ人の大多数も本家本元の「イギリス英語」が十分話せず、いわば「アメリカ方言」で誤魔化しているとも解釈できよう。私はもちろん、イギリス英語もアメリカ英語も完璧ではないが、我流の「サムライ英語」で何とか対処してきたわけだ。

数学に関しては、日本の「文系」と「理系」の区別は適当ではないと常々考えている。留學前の私は、「文系」でありながら、数学への「畏敬」の念を強く抱き、その結果、理学部数学部に連日通うという「一大冒険」をも敢行した。

「おい、君！君は経済専攻ではないのかね。数学科にトポロジーを学びにくるとは、恐れ入ったね。でもまあ、いいですよ。頑張って、《トポロジー経済学》を作って、世間をあっと言わせてくれたまえ！」

当時から、数学の先生の多くは、発想が自由なリベラル派で、リスク挑戦が大好きな人間であったようだ。私自身は、経済学の先生よりもむしろ、数学の先生から多くを学び、颯爽とした気分でアメリカのロチェスター大学で「数理経済学」の奥義を窮めるはずであった。ところが、物事が予想通りに運ばないのが、悲しき現実、あるいは嬉しき現実の姿なのである。

5. 数理経済学からリスク経済学へ「転向」する——憂鬱な気分の一掃

ロチェスター大学は、世界で指折りの数理経済学の本山だった。本山の玉座の位置におられたのが、「アロー・ドブリュー・マッケンジー理論」で有名なライオネル・マッケンジー教授だった。マッケンジー先生はトポロジー、とくに「角谷の不動点定理」を駆使することによって、諸々の市場のワーキングに関する「一般均衡の存在定理」を見事に証明された。

「諸君、これで存在定理の証明は完了！おお、なんと美しい定理のことか！」

私はそのとき、アメリカ流の学問の強さと弱さを同時に垣間見たような気がした。アメリカの大学は資金豊富であり、世界各国から留学生を多数受け入れていた。それはアメリカの包容力の大きさを物語るものだ。だが、アジア・アフリカなどの途上国の留学生の何人が、「美しい理論」を学ぶためだけに、はるばる海を渡ってくるというのだろうか。

事実、私がロチェスター大学で学位取得後、「学問の殿堂」の聳えるピッツバーグ大学で数理経済学を教えるようになったとき、学問上の試練に直ちに遭遇した。ちなみに、後者の大学は名作曲家フォスターの郷里に近く、また黒人の演歌歌手として最近売り出し中のジェロさんが卒業した大学でもある。

「ドクター・サカイ、私は貧しい南アジアの学生です。先生の一般均衡理論は、貧困の解決にどのように役立つのでしょうか？」

私は、このような質問を浴びせられて驚愕するとともに、「美しい理論」だけでは「貧しい社会」を救済できないことを瞬時に悟った。それ以来、私の心は美しい数理と厳しい現実との間で揺れ動いた。そうこうしている間に、応用数学の天才フォン・ノイマンとともにゲーム理論を構築されたモルゲンシュテルン先生が大学講演会に招かれた。その折、「サムライ英語」で同先生に発した質問が、他ならぬ冒頭の文章だったのである。

リスク経済学を本格的に研究して以来、研究上の私の憂鬱は霧散した。それはまるで「水を得た魚」のようだった。この分野のパイオニアたちは、アカロフ(Akerlof)、スペンス(Spence)、スティグリッツ(Stiglitz)などの少壮学者であり、そのイニシアルは「A」か「S」のいずれかである。そして、この三人は後年、リスク経済学への貢献が認められて、ノーベル経済学賞を受賞している。

私自身は、彼らとほぼ同年齢であり、名前のイニシアルも偶然にも「S」である。かかる偶然性は、「神の見えざる手」のお導きによるのか、あるいは「仏様の御慈悲」に基づくのかは、現時点に至るも定かとはいえない。

6. リスク研究学会の常連となる——つくばのロマンとリスク

私は個人的事情のために、1970年代のおわりに日本に帰国した。広島に短期間滞在し、かの「赤ヘル軍団」の初優勝の騒ぎに巻き込まれたものの、その後縁あって、新興学園都市つくばへと移住した。

当時のつくばは、さながら西部劇のフロンティアのような所であった。私が勤務した筑波大学は、日本の普通の大学でもなく、さりとてアメリカの大学でもないユニークな大学であった。学部がなく、教授会もなく、生協もない。学生は学類に所属するが、教師は学系に所属する。それとは別に大学院の修士課程と博士課程がある。このように人と組織との対応関係は入り組んだ「一対多対応」であった。

各組織の会合は短時間で終わったが、国会の予算委員会のように与野党が激しく激突した。私は初対面の先輩教師に対して、着任の挨拶をしたときの事を今でも鮮明に覚えている。

「貴方がサカイ君ですか。端的に言わしてもらえば、君は筑波へ来るべきではなかったね。明日にでも広島に戻ることも真剣に考えたまえ！」

差しさわりがあるので、今の時点では、これ以上のことは書けないが、「ああ、自分の筑波時代は短期間で終わりそうだな」とその時に感じたものだ。それでも、私の予想が見事に外れて、実に四半世紀の長きにわたって筑波に滞在する羽目に合いなつた。人間の予想はよく外れるものなのだ。人間界のリスクは一回限りのことが多く、自然界のリスクのような規則性に欠けがちである。

私の長く荒涼たる「ツクバ砂漠」の中で、まるで「オアシス」のように瑞々しい場所と時間が存在した。それが当時、筑波大学に置かれていた日本リスク研究学会事務局であり、有能な事務局長の池田三郎氏（社

会工学系教授) とのお付き合いであったのだ。池田先生と私は同年齢、生まれも同じ大阪周辺である。池田先生はキタの北野高校(旧一中)を御卒業されて、K大学工学部へ進学された。わたしはミナミの住吉高校(旧三中)を卒業して、もうひとつのK大学経済学部へ進学した。そして、20年後に巡りめぐって、同じ筑波大学に勤務するという奇縁であった。この巡り合わせに人生のロマンとリスクを感じるのは、果たして私だけであろうか。

それはともあれ、池田三郎先生と私とは波長が大変よく合った。また、学際的でオープンな日本リスク研究会を通じて、工学・環境科学・農学・医学・衛生学など、実に多彩な好漢と交流することができた。例えば、ハワイ・北京・神戸などでの国際学会にも(時に会長・副会長として)企画参加できたり、東海村・東京・京都・徳島などでの年次大会にも出席できる喜びを得た。今はただ、感謝、感謝あるのみである。

7. 新世紀に相応しい学問を考える——リスク学の新しい役割

我々は新世紀に突入した。子供のときには、「二十世紀梨」という名の果物が大好物であった。その果物は、今でも存在しているのだろうか。それとも二十一世紀に相応しい変化や進化を遂げているのだろうか。

私は基本的に経済学者であるので、せいぜい社会科学のことしか十分分らない。自然科学のことは、親切な友人達からの耳学問のおかげで知識を蓄積し、それ以上のことは勝手に想像力を発揮するばかりだ。これは私の直感にすぎないのだが、現在の社会科学、とくに経済科学は相当に行き詰っているのではないだろうか。私は数年前に日本学術会議会員だったのだが、当時の会長の黒川清先生も「日本の閉塞状況」をいたく感じておられた。その際に纏められた文書が、日本学術会議編の『日本の計画』なのである。

私は確信する。新世紀に相応しい、文系・理系の枠を超えた学際的な新学問の創造が、今ほど待望される時期は他にないように思う。わがリスク学は、そのために重要な触媒の役割を果たすだろう。岩波書店から新しい「リスク学入門」シリーズが刊行されたのも、そのような新しい潮流の現われである。その第1巻第1章は、私が担当することになったのは不可思議な御縁であろう。

今から5年前、私が勤務する滋賀大学において、リスク経済・経営を専門的に研究する「社会人大学院」が開設された。そして既に、14名の「リスク博士」が巣立っていった。今後は、リスク学を専門とする、学際的・総合的な昼間学部や大学院が、日本や世界に続々輩出するだろうことを非常に期待したい。

以上において、私は自分の長かったようで短かった「リスク人生」を振り返ってみた。その人生を総括すると、それは「リスクはクスリ、クスリはリスク」という逆さ言葉によって表現されるようである。リスクはときに恐ろしく、コントロールが難しい。しかし、リスクなしの人生や自然や歴史は存在しえない。人間はリスクをむしろクスリと見なし、飛躍するチャンスを与えてくれるものだ。このように多様で、変幻自在な対象を分析しようとする、我がリスク学の将来は、きっと薔薇色だろうと期待している。

現在の私は、かの大阪大空襲に屈することなく、有難く頂戴してきた「余生」を一層長く有効活用したい気持ちで一杯だ。実に、リスクは「元気の出る栄養剤」なのである。

2. From the President (会長からのメッセージ)

第10期役員会を振り返って

2008年5月

会長 土田昭司

2006年6月の理事会・総会において、はからずも日本リスク研究学会会長を拝命して微力ながらその任に就かせていただいていたまいりました。2年間の任期を本年6月末に終えることとなります。この間、会員の皆様には多大なご協力をたまわりましたことに厚く御礼を申し上げます。

第10期役員会(2006年～2008年)において行った活動については、常任理事会の設置を認めていただいたことが最も意義深いことではなかったかと考えています。東海明宏副会長をはじめ、近本一彦理事、長坂俊成理事、前田恭伸理事、間正理恵理事(五十音順)、そして編集委員長を途中からお願いした高尾厚理事に常任理事の大役を担っていただき、学会活動に多大なご尽力を頂きました。

間正理恵理事には、編集委員長として奮迅いただき、邦文誌である日本リスク研究学会誌の論文投稿システムをそれまでの郵送による方式から電子メールを用いる方式に変更・整備していただき、その果実ともいえる年2号発行であった日本リスク研究学会誌を年3号発行への充実を達成していただきました。また、途中から編集委員長を引き継いでいただいた高尾厚理事と長坂俊成理事には、事務局係を委託している大阪大学生活協同組合との共同開発であるwebによる論文投稿・審査システムの最終的な構築にもご尽力を頂いています。webによる論文投稿・審査システムは構想されてから長い時間がかかりましたがようやく目途がつき近日中に稼働の予定です。稼働が本期役員会の任期末になってしまったことは申し訳ないことでした。

近本一彦理事には、広報委員長としてこのように大変に充実したニュースレターを発行していただいております。長坂俊成理事には、まずは情報管理委員長として本会独自のwebアドレスを取得するとともに本会のwebページ(HP)の充実・管理に努めていただきました。また、先述のように任期途中から編集委員長を担っていただいております。

前田恭伸理事には任期中に米国メリーランドでの在外研究にいかれることになったこともあって本会のwebページ(HP)のうち特に英文ページの充実を努めていただきました。また、長坂俊成理事が編集委員長を担うにもなって前田恭伸理事に情報管理委員長をお願いしています。

土田は、学会事務局と海外渉外委員長を兼務させていただきました。

第10期役員会の執行委員である常任理事会は上記のような活動を行ってきました。十分なサービスを提供することができましたかどうか心許ないのですが、会員の皆様からもし誉めていただけたところがあるとすればそれはすべて東海副会長、近本理事、長坂理事、前田理事、間正理事、高尾理事のご尽力によるものです。常任理事会の至らぬところはすべて土田に責があると認識しております。

本年7月から次期(第11期)役員会が活動を始めることとなります。次期役員会には一層のご活躍をご期待申し上げます。

会員の皆様にご協力をたまわりましたことを重ねて厚く御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

3. 日本リスク研究学会誌編集委員長の交代

日本リスク研究学会誌の編集委員長が、間正理恵理事から長坂俊成理事に下記のように交代します。前号のニューズレターにおいて高尾厚理事への交代をお知らせしましたが、高尾理事のご病気のため長坂俊成理事に交代することになりました。

記

間正理恵 理事 : 第 18 巻 1 号まで担当

高尾厚 理事 : 第 18 巻 2 号担当

長坂俊成 理事 : 第 18 巻 2 号より担当

以上

4. 第 2 回リスク世界会議への若手会員派遣プログラム[結果報告]

第 2 回リスク世界会議[The Second World Congress on Risk (SWC)]実行委員会から日本リスク研究学会に対して 2008 年 4 月に「出席者・発表者が少数になる虞があるため、第 2 回リスク世界会議での発表者を増やす何らかのアクションを実施してほしい」との緊急の依頼がありました。常任理事会ならびに海外渉外委員会ではこれに応じて下記のように「若手会員派遣プログラム」を実施しました。

応募者について慎重な審査の結果、次の 2 名の会員に第 2 回リスク世界会議への渡航費(各 10 万円)を支給することになりました。

○中山亜紀 [京都大学工学研究科] (正会員)

○佐々木克典 [京都大学工学研究科] (学生会員)

記

本会ML(電子メールによる広報システム)により次のように募集した。

第 2 回リスク世界会議 [The Second World Congress on Risk (SWC)] への若手会員派遣プログラム

日程： 2008 年 6 月 8 日－11 日

場所： Hilton Guadalajara Hotel [Guadalajara, Mexico]

詳細： http://www.sra.org/docs/2008_World_Congress.pdf

支援内容： 渡航費として 1 名に 10 万円を支給する(3 名まで)

応募条件： ① 2008 年 4 月 1 日現在 35 歳以下である本学会会員

② 第 2 回リスク世界会議においてポスター発表を行う者

応募手続き： 2008 年 4 月 20 日までに下記のフォームにて応募する意志があることを常任理事会に通知するとともに、第 2 回リスク世界会議の web site [<http://birenheide.com/sra/world08/index.php3>] から発表を申し込む(submit する)。2008 年 4 月 25 日までに発表内容の英文アブストラクト(500 words 程度)を常任理事会に提出する。常任理事会において 2008 年 4 月 30 日までに支給対象者を決定する。

以上

5. 事務局便り

5.1 平成 20 年度 総会開催のお知らせ

平成 20 年度の総会を下記のように開催いたします。ご出席くださいますようお願いいたします。

総会にご欠席の場合は、必ず委任状をご提出ください。

会場： 東京大学 山上会館（別紙案内図または http://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/cam01_00_02_j.html 参照）

日時： 2008 年 6 月 20 日（金）13:00 ～ 14:00

5.2 平成 20 年度 第 21 回シンポジウムのご案内

第 21 回シンポジウムを下記のように開催いたします。多数ご参加くださいますようお願いいたします。

会場： 東京大学 山上会館（別紙案内図または http://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/cam01_00_02_j.html 参照）

日時： 2008 年 6 月 20 日（金）14:00 ～ 17:00[第 1 部] 17:20-19:20 [第 2 部(地階レストランにて)]

題目： 『新興・再興感染症のリスクに学ぶ』（担当：東海明宏副会長）

参加費： ・第 1 部（シンポジウム） [*当日払いも同額]
会員及び学生 2,000 円、一般 3,000 円（講演要旨集代を含む）
・第 2 部（意見交換会） [*当日払いも同額]
会員及び学生 3,000 円、一般 4,000 円（立食代を含む）

協賛学会：エコケミストリー研究会、環境ホルモン学会、「環境リスク管理のための人材養成」プログラム、(社)環境科学会、(社)環境情報科学センター、自然災害学会、(社)大気環境学会、(社)土木学会、(社)日本化学会、日本グループ・ダイナミクス学会、日本社会心理学会、(社)日本動物学会、(社)日本水環境学会、(社)日本薬学会、日本疫学会、日本環境管理学会、日本環境学会、(社)日本原子力学会、日本分子生物学会、廃棄物学会、日本環境化学会、日本環境毒性学会、日本公衆衛生学会、(社)日本農芸化学会 【順不同】(予定も含む)

【開催趣旨】

現代生活を取り巻く健康リスクの中で新興・再興感染症は、人や物の移動が地球規模で起きている現代にあっては、一部の地域内だけにとどまらず国境を越えた脅威となり得るものであり、警戒が必要であるとされています。世界的な大流行のおそれが指摘されている新型インフルエンザに対し、日本政府は水際対策を 4 月 9 に公表しました。そこでは、シナリオを作成し、新型インフルエンザが発生した場合の水際対策を構築するという流れであり、多くのハザードに対するリスク評価・管理の手順として共通するものです。そこで、本シンポジウムでは、この分野の第一線でご活躍されている専門の先生にご講演をいただく機会を設けました。皆様のご参加をよろしくお願い申し上げます。

プログラム：

[14:00-14:20] 開会の挨拶

東海明宏（本会副会長、大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻教授）

—第 1 部—

[14:20-14:50] 元会長講演

食品安全から見た安全と安心の葛藤と折り合い・・・関澤 純（本学会元会長、徳島大学教授）

[14:50-17:00] シンポジウム

座長 東海明宏

○重篤感染症—事実と常識，非常識，間の格差—

=リスクと危険はイコールではない。日本に染み付いた無知=危険概念の行き着く先

.....倉田 毅（富山衛生研究所長、元国立感染研所長）

○BSL4 施設世界の現状：世界の視点から日本を見る

.....倉根一郎（国立感染症研究所ウイルス第一部部長）

—第2部—

[17:20-19:20] 意見交換会（山上会館内 地階レストラン）

[お申し込み方法]

同封の「参加申込書」にご記入、事務局にご返送の上、下記口座へお振り込み下さい。

[第21回シンポジウム参加費お振込先]

郵便振替口座： 00330-0-11964 （加入者名：日本リスク研究学会）

銀行口座： 三井住友銀行 南千里支店 普通 0970889 （日本リスク研究学会事務局）

（※できるかぎり、郵便振替口座をご利用下さい。）

[お申し込み・お振り込み締め切り日] 2008年6月11日(水)

万一、振り込み日を過ぎてお振り込みをされた場合は、郵便振替受領書・ご利用明細書をシンポジウム当日に必ずお持ち下さい。受領書をお持ちいただかなければ、当日会費をお支払いいただくことになります。

お願い

お振り込みの際には、お手数ではございますが、郵便振替書通信欄に「第21回シンポジウム参加費」とご記入の上、必要金額（詳細金額および合計金額）をお書き添えください。

（郵便振替書通信欄記入例）

「第21回シンポジウム参加費」として

シンポジウム 2,000円(会員)

懇親会 3,000円(会員)

合計 5,000円

お問い合わせ・お申し込み先：〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-9 大阪大学豊中キャンパス内

大阪大学生生活協同組合 事業企画室内

日本リスク研究学会事務局係 担当：川畑

FAX： 06-6841-1938 E-Mail: office1@sra-japan.jp

（お問い合わせには、Faxあるいはmailをご利用下さい。後日ご連絡差し上げます。）

5.3 第43回（第10期第4回）理事会の案内（役員の方はご予定下さい。）

会場： 東京大学 山上会館（案内図を参照）

日時： 2008年6月20日（金）午前10:00-12:00

5.4 第21回年次大会の案内

第21回年次大会

◇ 日時： 2008年11月29日(土)–30日(日)

◇ 場所： 関西大学 千里山キャンパス [大阪府吹田市]

◇ 担当： 土田昭司会長

最新の情報はHP、学会ニュースでお知らせいたします。

5.5 日本リスク研究学会誌のwebによる論文投稿・審査システムについて

日本リスク研究学会誌のwebによる論文投稿・審査システムが近日中に稼働します。詳しくはHPに掲載いたします。

5.6 学生会員の皆様へ

学生会員の方には学生証のコピーを毎年4月1日以降提出していただいております。

郵送がまだの方は、早急に学会事務局係宛にお送り下さい。

5.7 変更届

ご連絡先（ご住所・e-mail等）に変更が発生した場合は、事務局係（e-mail : office1@sra-japan.jp, Fax : 06-6841-1938）まで早急にお知らせ下さい。

5.8 学会事務局(係)e-mail アドレスの変更

学会事務局（係）のe-mailアドレスが下記の通り変更となりました。

旧) office@sra-japan.jp → 新) office1@sra-japan.jp

5.9 日本リスク研究学会共催・協賛イベント一覧（速報）

[2008年度]

1) イベント開催日：2008年6月18日(水)

共催・協賛の別：協賛

主催：「環境リスク管理のための人材養成」プログラム事務局

イベント名：「環境リスク管理のための人材養成」プログラム第34回特別講演会

会場：大阪大学中之島センター 10F 佐治敬三メモリアルホール

連絡先・申込先：「環境リスク管理のための人材養成」プログラム事務局

Tel&Fax : 06-6879-4733 E-mail : risk-office@em.see.eng.osaka-u.ac.jp

2) イベント開催日：2008年7月10日(木)、7月11日(金)

共催・協賛の別：協賛

主催：社団法人 日本機械学会

イベント名：第18回環境工学総合シンポジウム2008

会場：独立行政法人産業技術総合研究所 臨海副都心センター

連絡先：日本機械学会環境工学部門（担当職員 宮原ふみ子）

Tel : 03-5360-3505 Fax : 03-5360-3509 E-mail : miyahara@jsme.or.jp

3) イベント開催日：2008年8月8日(金)

共催・協賛の別：共催

主催：エコケミストリー研究会

イベント名：特別シンポジウム「化学物質関連法の新しい動きと今後のあり方」

会場：自動車会館（JR 総武線／東京メトロ／都営地下鉄「市ヶ谷駅」徒歩2分）

連絡先・申込先：エコケミストリー研究会

Fax : 045-336-4036 E-mail : ecochemi@ynu.ac.jp

6. 編集後記

今回のリスク放談は、当学会の元会長である酒井先生にお願いした。酒井先生をご存知の方がこの放談を読めば、まるでニュースレターから酒井先生の声が聞こえてくる錯覚に陥ったのではないだろうか。

さて、先生の放談の中に登場する二十世紀梨については、小生は、梨といえば二十世紀梨というくらい、小さい頃から良く食べてきた。今でも幼い頃に育った鳥取県の知己から小生の実家に送ってきてくれている。また、赤ヘル軍団といえば、江夏が好きで彼がカーブに入って優勝した当時、学校の帰りに学校近くの電気屋のテレビでその優勝の行方をお店のガラス越しに見守っていたのが、中学校二年生のときである。酒井先生の言葉を借りると、こんなところにも先生と小生の間には見えざる糸で縁が結ばれていたのではないだろうか。

戦争で一度は失くした命を・・・というくだりは、小説・映画でよく耳にするものの、身近な人でそれを覚悟され、学問にて敵地に本土決戦に挑まれたことを思うと、やはり、我々の海外出張の温さを省みなければならぬだろう。

酒井先生の言われる「サムライ英語」を、英語は流暢でなくてもよいから、何を議論し、世界を相手に何をしたいのか、自分は何に立脚して生きているのか、ツールではなく、コンテンツにこだわられ、と解釈するのは超訳し過ぎであろうか。(註 意識しすぎることを超訳というようで、この使い方が正しいかどうか分からないが、使ってみた)

海外出張といえば、先日、ルーマニアのヤシというところに行った。ルーマニア北東部の主要都市で、ルーマニア全土からみれば、ブカレストに次ぐ第二、或いは第三の都市とも言われる。人口は約 35 万人で、ルーマニアで最も古い大学などがある文化都市である。旧モルドバ公国の首都であるが、遡れば、106~271 年には、ローマ帝国の支配下にあり、言語は、イタリア語が最も近く、イタリアとの国交も盛んである。ちなみに、たまたま入ったレストランでは、ルーマニア料理よりも、スパゲッティの方が美味かった。

そのヤシで変な体験をした。そこに出張で行ったところ、東洋人がほとんどいない。滞在した三日間に、我々以外の東洋人には一人も出会わなかった。中国人もいなければ、中華料理店もなかった。こんな経験は始めてである。

そのようなところに行ったためか、我々が立っているだけで、ジロリと見られる。歩いていても、じーと見られる。目で追われる。中肉中背よりも若干小さめの、目がくりっとして、しかも涼しげな色白の可愛い女の子たちが、すれ違いざまにチラッと見る、珍しげにじと一っと見る、怪訝そうに見る、微笑ましく見る、ときに遠くから何か話しながらこちらをちらりと見る・・・とにかく見られる。

どのような気持ちで見ているかは分からないが、とにかく、老若男女を問わず、見つめてくる。最初は、嫌な感じで、見られることにも慣れていなかった。体験のない変な例えだが、戦争が終わった地に降り立った兵士のような感じだったが、見られているうちに、それがだんだんと気分がよくなって、くせになってきた。むしろ、見られないと寂しく思えてきた。“あれ、何で見てくれないんだろう”とさえ思えてきた。

小さな子供も珍しそうに、近寄ってきて、**Can you speak English?** と聞いてきた。**Yes, a little bit.** と言ってもきょとんとしている。**How old are you?** と聞いても、固まったまま回答がない。しばらくして、小生も小さい頃、習いたての英語 (**This is the pen**) を外人に言って、走り去っていたことを思い出した。言い放つだけである。

ホテルに帰る途中、やはりティーンエイジャーの女の子二人連れが、「**Nihon-Jin?**」と呼びかけて、走り

去っていった。「So-desu!」と言ったが、返事があるわけでもない。振り返り、笑いながら、横断歩道を渡って去っていった。でも、この場合は、すごく好意的に感じられた。小生が小さい頃に、「Gai-Jin」と指差すのとは違っていた。

東洋人がいないのに、なぜ日本人と声をかけられたのだろうか？ 見られているうちに、見られる気持ち良さがわかったと書いたが、「日本人」と言われてからは、気持ちよさとは違う感情が出てきた。見られてもいいようにちゃんとしなければという思いである。

これまで、リスク放談に見られるような大先輩方の背中を見てきた。身近な諸先輩方を見てきた。アメリカを見てきた。ヨーロッパを見てきた。いつもいつも、上や周りを見てきた。ところが、自分の年齢、立場、役職からすれば、もうとっくに人に見られているはずなのに、そんな意識はほとんどなかった。

今回のヤシでの経験から、「見られる」ということを意識させられた。自分だけではない。日本という国が見られているのだ。もう見る立場ではない。見られる立場で、振舞わなければならない。日本はすでにそういう国になったということを強く意識しなければならない。見られることを意識すると、心地よさと律する気持ちが湧き上がってくる。それはファッションではない。責任ある立場で見られることを意識することが重要なのだ。その大事さをヤシのジロリから学んだ経験を披露させて頂いた。

広報委員長 近本一彦

